

〔論 説〕

古代・中世の「海上大国」・「陸上大国」と戦争

—国際政治の構図をめぐる考察—

水 野 均

本稿の目的

「世界史は陸の国に対する海の国のたたかい、海の国に対する陸の国のたたかいである」<sup>(1)</sup>と、C・シュミット(20世紀ドイツの公法・政治学者)は記している。これをはじめとして、国際政治が、陸上と海上にそれぞれ勢力圏を持つ二つの大国によって主導される<sup>(2)</sup>、そこには戦争が大きな比重を占めているという研究は、従来から数多く散見される<sup>(3)</sup>。一方で、現実の国際政治を論じる際にも、英国対ロシア、米国対ソ連、といった捉え方が繰り返されている。

以上のような観点を踏まえた上で、国際政治を、「海上大国(太平洋、大西洋、インド洋等の主要な海域を支配する)」と「陸上大国(ユーラシア大陸の中心部を支配する)」が次々と現れ、時に関係しつつ戦争を繰り返すうちに勢力を後退させ、他の国と立場を代わっていく、という構図から捉えなおしてみたい。この稿では、古代(紀元前5世紀前後)から中世(13世紀前後)の時期を対象として検証する。

「海上大国」の台頭—古代ギリシャの都市国家

紀元前8世紀-6世紀にかけて、アテネやスパルタ等ギリシャの都市国家は地中海の沿岸で植民地の形成に乗り出し、黒海及び北アフリカの沿岸、シチリア島、イタリア及びフランスの南部に勢力圏を拡大していった。一方、同時期中近東で版図を広げていたアケメネス朝ペルシャ(現在のイラン、トルコ、エジプトを領土とした)も地中海に勢力圏を伸長させようとしたため、ギリシャとペルシャの両陣営は争いに突入した(ペルシャ戦争、前492-前449年)。

(1) Carl Schmitt, *Land und Meer—Eine weltgeschichtliche Betrachtung*, Reclam Verlag, Stuttgart, 1954. 引用は、C・シュミット著、生松敬三・前野光弘訳『陸と海と—世界史的一考察』福村出版、1971年、12頁。

(2) Ludwig Dehio, *The Precarious Balance, Four Centuries of the European Power Struggle*, Knopf, New York, 1961. Halford J. Mackinder, *Democratic Ideals and Reality*, W. W. Newton, New York, 1962. 邦訳は、マッキンダー著、曾村保信訳『デモクラシーの理想と現実』原書房、1985年、Alfred Thayer Mahan, *The Influence of Sea power: upon History, 1660-1783*, London, 1965 edn. 邦訳はマハン著、北村謙一訳『海上権力史論』原書房、2008年。

(3) Robert Gilpin, *War and Change in World Politics*, Cambridge University Press, New York, 1981. George Modelsky, "The Long Cycle of Global Politics and the Nation-State", *Comparative Studies and history* 20, April 1978, p214-235.

この時、アテネとスパルタは他の都市国家と、夫々デロス同盟とペロポネソス同盟を形成してペルシャ（皇帝はダレイオス1世とクセルクセス1世）に対抗した。このうち、デロス同盟は傘下の都市国家が軍艦・兵員又は資金を提供する義務を負い、その資金はアテネが管理していた。また、ペロポネソス同盟では、戦時に傘下の都市国家が兵力を提供して合同軍を結成し、その指揮をスパルタが執る仕組みとなっていた。

さらにアテネは、ペリクレス（政治指導者）の提案で百隻とも2百隻とも言われる大規模な艦隊を建造し、スパルタはリュクルゴス（政治指導者）の下で、市民から成る重装歩兵（頑丈な鎧等で全身を武装した）を整備して戦いに臨んだ。他方のペルシャは大軍を派遣したものの、海上での輸送に頼らざるを得ないという不利な条件に置かれ<sup>(4)</sup>、また軍の大半は傭兵が占めていたために士気も低く、アテネの海軍とスパルタの陸軍とに敗れた。また、同時期の地中海西部でも、同じくギリシャの都市国家シラクサがヒメラの海戦（前480年）でフェニキア人（元来はシリア付近を拠点とした）の植民都市であるカルタゴ（現在の北アフリカ地中海沿岸のチュニジア付近に位置し、ペルシャの支援を受けていた）を破り、ギリシャ側が地中海に支配権を確立した。

その後、アテネは大規模な艦隊を常備してペルシャの反攻に備えると同時に地中海一帯の貿易を独占し、「デロス同盟」に加盟する都市国家も2百を数えるなど、「アテネ帝国」<sup>(5)</sup>を形成した。こうしたアテネによる支配にデロス同盟を構成する他の都市国家は不満を抱き、ナクソスのように離脱するものも現れたが、アテネは軍隊によってナクソスを包囲して同盟への復帰を強要するなど専横を極め、やはり貿易に拠って立つコリントスやアイギナにも脅威となっていた。

その一方で、スパルタ及びペロポネソス同盟側は、農業を基盤としていたために戦勝の恩恵が少なかった。このため、スパルタ側はアテネの繁栄に不満を募らせ、アテネがスパルタと対立するアルゴスと同盟を結んだことから、両同盟はペロポネソス戦争（前431-404年）に突入した。当初は、海軍力で勝るアテネがペロポネソス同盟側を抑えつけ、戦局を優位に展開した。これに対してスパルタはペルシャから資金の援助を受けて戦いを継続し、ペロポネソス同盟によってアテネを包囲した。その後、アテネはシチリア島への遠征に失敗し、デロス同盟から離反する都市国家も相次いだ結果、スパルタに敗北してデロス同盟も解散に追い込まれた。

その後、スパルタはアテネに代わってエーゲ海一帯に支配権の確立を目指した。しかし、これは、テーベやコリントス等、他の都市国家からの反発を招いた。さらにスパルタがアテネを攻撃すると、アテネは新たな同盟を募ってスパルタに対抗し、コリントス戦争（前395-387年）が始まった。この時、ペルシャはアテネに財政支援を行って海軍を増強させた。ペルシャがペロポネソス戦争時にスパルタを支援したのはアテネによる勢力圏拡大を抑えるために過ぎず、その目的を達成した以上、ペルシャがスパルタを支援し続ける必要はなかった<sup>(6)</sup>。さらにペルシャはギリシャ側に圧力と干渉を強め、ついにスパルタはアテネと共に、「大王の和約」（前386年）によってイタリア半島南岸の支配権をペルシャ（当時の

(4) 前掲書『デモクラシーの理想と現実』46頁。

(5) 桜井万里子編『ギリシャ史』山川出版社、2005年、82頁。

(6) 同上、90-91頁。

皇帝はアクタクセルクセス2世)に認め、ペロポネソス同盟も解散した。

その後、アテネはナクソスの海戦(前375年)でペルシャの海軍を破ったものの、度重なる戦争から市民軍が不足し、傭兵に依存していたため、地中海の支配権を長く維持するのは難しかった。また、スパルタは新たな同盟を募る過程でテーベ(当時の指導者はエパミノンドス)と衝突し、レウクトラの戦い(前371年)に敗れた。スパルタも主力となる陸軍の兵力が度重なる戦争で打撃を受けており、アテネに代わって地中海の支配権を担うのが困難となっていた<sup>(7)</sup>。こうして、ペルシャ戦争の時と異なり、ペルシャによって繋がりを断ち切られた都市国家は、隣接するマクドニアに敗れて(ケーロネアの戦い、前338年)、その支配下に収められた。

### 初の「海上大国」—ローマ帝国

一方、ギリシャに近いイタリア半島では、都市国家の一つであったローマが、前3世紀頃までにイタリア半島の北部以南を版図に収めた後、さらに経済活動の場を求めて地中海へと進出していった。この結果、ローマは、既に地中海の西部を勢力圏に収めていたカルタゴ(前出)と衝突し、三度にわたるポエニ戦争(前264-241年、前218-201年、前149-146年)の末に勝利した。さらには、地中海の東部に進出してマケドニア(前出)及びコリントを滅ぼした(前146年)のに続いて、ギリシャの都市国家も支配下に置いた。その後も、ペルガモン(現在のトルコ内陸部に位置した)及びシリアのセレウコス朝(現在のシリア及びトルコ付近を支配した)を併合し(前133年、前64年)、プトレマイオス朝のエジプトを属州に収めた(前30年)ことにより、地中海の全域を支配する「海上大国」としての立場を確立した。

こうした戦争を進める際、ローマ自体は経済力・軍事力が共にカルタゴを下回っていたが、ギリシャと同様に市民による重装歩兵団を備えた上に海軍の艦隊も充実させて臨んだ。これに対して、カルタゴはアフリカ及び欧州の各地から募った傭兵を主力としていたために軍の統制を欠き、勝利を収めたローマはカルタゴからシチリア島を獲得して一度は講和した。その後、カルタゴはハンニバルを指揮官とした精鋭の歩兵部隊を動員してローマに再度戦いを挑み、当初、ローマ軍は敗北を重ねた。しかし、カルタゴ軍は海上の支配権をローマに握られていたため、ヒスパニア(現在のスペイン)からガリア(現在のフランス)を経由して進軍せざるを得なかった。この状況下で、スキピオに率いられたローマ軍は、ザマの戦い(前202年)でカルタゴ軍の背後から補給路を遮断して不利な形勢に追い込んで打ち負かし<sup>(8)</sup>、カルタゴからヒスパニアの植民地を割譲させて、地中海の西部を支配下に置いた。その後、ローマはマケドニアを攻撃した(前200年)際、カルタゴに食料を支援するよう命じた。さらに、セレウコス朝に侵攻する際には、マケドニアからの支援を得て臨んだ。

このように、ローマは戦争で打ち破った国・地域を自らの同盟に取り込んだ上で、独自では不十分な軍事力・経済力を提供させて戦勝を続け、勢力圏を一層拡大していった。一

(7) V・D・ハンセン著、遠藤利国訳『図説 古代ギリシャの戦争』東洋書林、2003年、168頁。

(8) 前掲書『海上権力史論』3頁。

方で、カルタゴやマケドニアが再び対抗する姿勢を示すと、ローマはそれを自らへの潜在的な敵対行為と捉え、破壊や解体という挙に出た<sup>(9)</sup>。

その後、ローマは欧州大陸及び中近東の内陸にまで軍事力による領土の拡大を続け、トラヤヌス帝の治世下には、最大の領域を獲得した(114-117年)。その支配は、東はメソポタミア、西はヒスパニア、南はアフリカのサハラ砂漠、北はドナウ川付近のダキア(現在のルーマニア付近)及びガリアからブリタニア(ブリテン島)の南半分までに及ぶ、文字通りの「帝国」となった。

しかし、こうして版図を広げた結果、ローマ帝国は自らの安全を確保するために軍隊を増強することを余儀なくされた。このため、属州の住民からも兵士を募る等の措置を講じた結果、アウグストゥス帝の治世(前27-後14年)に25万人だった常備軍は、ディオクレティアヌス帝の時代(284-305年)には45万人から60万人へと膨張した。他方で、帝国全体の人口は200年に4千6百万人に達した後に減少し、軍隊を維持するための税収が不足したため、帝国の財政は悪化した<sup>(10)</sup>。そして、これは、人口の減少も相まって、兵力自体の不足ももたらした。

さらに、ローマ帝国の拡大は、近接する国家・地域からの警戒も招いたため、武力衝突の原因となった<sup>(11)</sup>。東方のササン朝ペルシャがローマ帝国に反攻した際、遠征軍を率いたヴァレリアヌス帝はシャプール1世旗下のペルシャ軍に敗れて捕虜となった(260年)。また、2世紀頃からは北方のゲルマン人が帝国の領域内に侵入・移住し始めたが、国境を防備する兵力の不足するローマ帝国は、それを止めるのが困難となっていたのみならず、遂にはゲルマン人を傭兵とするまでに追い込まれていた。

こうした中で、テオドシウス帝はローマ帝国を一体として維持し続けることの限界を悟り、帝国を東西に分割することに踏み切った(395年)。これは、事実上、初の「海上大国」が崩壊したことに他ならなかった。その後、東ローマ帝国には、海洋に隔てられていたことからゲルマン人の脅威が比較的及ばず、また、ササン朝ペルシャからの侵攻も防ぎ続けた<sup>(12)</sup>。しかし、西ローマ帝国はゲルマン人からの度重なる軍事侵攻にさらされ、ついにゲルマン人の傭兵隊長オドアケルが皇帝を退位に追い込み(476年)、滅亡するに至った。

### 「海上大国」復活への試み—十字軍

西ローマ帝国の崩壊した後の欧州大陸では、8世紀-9世紀頃にかけて、ゲルマン人及びノルマン人の建てた国家(フランス、イタリア、神聖ローマ帝国等)が林立していた。しかし、こうした国家間・国家内では国王や貴族・諸侯の上下関係が明確でなく、秩序が不安定となっていた。こうした中で、ローマ教皇(西欧を中心とするカトリック教会の指導者)は、独自の領地(教皇領)や統治機構(教皇庁)を持ち、傘下の全教会を監督するの

(9) A・ゴールスワーシー著、遠藤利国訳『図説 古代ローマの戦い』東洋書林、2003年、82-84頁。

(10) Azar Cat, *War in Human Civilization*, Oxford University Press, 2008. 引用は、A・カット著、石津朋之他監訳『文明と戦争(下)』中央公論新社、2012年、57頁。

(11) Bryan Ward-Perkins, *The Fall of Rome: And the End of Civilization*, Oxford University Press, 2006. 引用は、B・W・パーキンス著、南雲泰輔訳『ローマ帝国の崩壊』白水社、2014年、64頁。

(12) 同上、100頁。

みならず、各国の騎士・諸侯に対して国王・皇帝に忠誠を尽くす義務を命ずるなど、国家を超えた支配権を握っていた。そうした中で、ローマ教皇のレオ3世は、東ローマ帝国に従属するような立場から脱しようと、フランク王国（ゲルマン人に属するフランク族が現在のフランス付近に建てた）のカール国王に西ローマ帝国皇帝の位を授けた（800年）ため、教皇と東ローマ帝国との関係は悪化した。

そのような中、11世紀前後から、欧州のキリスト教徒には、開祖イエスが葬れている中近東のエルサレムに巡礼する習慣が広まっていた。これに対し、中近東のイスラム系諸国のうち、セルジューク・トルコが、中近東一帯での貿易を独占しようと巡礼者を圧迫し始め、エルサレムを占領した上に、東ローマ帝国の領内も攻撃し始めた。そして、この事態に窮した東ローマ皇帝は、対立していたローマ教皇に救援を求め、これに応じたローマ教皇のウルバヌス2世は、フランスのクレルモンに公会議（聖職者が重要な事項を決定するための場）を招集し（1095年）、「トルコ人によって東方のキリスト教徒が苦しんでいるのを救う必要がある」<sup>(13)</sup>と呼びかけた。

実は、この公会議より20数年前にも、当時のローマ教皇グレゴリウス7世は、東ローマ皇帝からの救援を求められた際、神聖ローマ帝国皇帝のハインリヒ4世に宛てた手紙の中で、「聖地エルサレムに世俗国家を建てるために遠征軍を送る」という計画に協力するよう求めていた<sup>(14)</sup>。これは、キリスト教の勢力圏を、東ローマ帝国から中近東にまで広げ、事実上、教皇の支配する新たな「海上大国」を、かつてのローマ帝国のように、地中海一帯に築こうという狙いを示していた。

こうして、教皇の呼びかけに応じ、欧州各国の国王・諸侯・騎士等から成る十字軍が結成され、数次にわたってエルサレムを奪回するための戦いを開始した。まず第1回十字軍（1096-1099年）は、イスラム側と激戦の末、エルサレムを占領した後、同地にエルサレム王国を樹立した。しかし、同王国には、騎士と兵士を合わせて600人程の軍隊しか駐留せず（後には、守備力の不足を補うために巡礼者も加わった）、イスラム側の大军から絶えず攻撃を受けたために滅亡した（1187年）。その後、第2回（1147-1149年）・第3回（1189-1192年）の十字軍がエルサレムを奪い返すために送られたが、中近東までの長い陸路・海路を遠征するという不利も重なり、目的の達成には至らなかった。また、東ローマ帝国側も、イスラム側に奪われた領土が十字軍によって回復されると、十字軍の活動には非協力的となり<sup>(15)</sup>、東ローマ帝国が地中海の全域を支配していた<sup>(16)</sup>ことも、十字軍の迅速な移動に支障を及ぼしていた。

さらに、十字軍に参加する国王・諸侯・騎士等は、領土及び戦利品を獲得しようという実利を求め、ベネチア等北イタリアの沿岸都市が兵の移送に協力したのも、それによって地中海の貿易を独占しようと狙ったためであった。これに対して、教皇は十字軍を直接指揮する権限を持たず、軍隊が十字軍本来の目的を逸脱した場合に統制するのが困難となっていた。実際、第4回十字軍（1202-1204年）は、ベネチア商人と共謀して東ローマ帝国

(13) 新人物往来社編『ビジュアル全書 十字軍全史』新人物往来社、2011年、16頁。

(14) 橋口倫介『十字軍』岩波書店、1974年、114頁。

(15) Rodney Stark, *God's Battalions: The Case for Crusades*, Harper Collins Publishers, 2009. 引用は、ロドニー・スターク著、櫻井康人訳『十字軍とイスラーム世界』新教出版社、2016年、201頁。

(16) 同上、82頁。

の首都コンスタンティノープルを占領してラテン帝国 (1204-1261年) を建て (この間、東ローマ帝国は途絶した)、十字軍自体も教皇から破門されるに至った。

その後、第5回 (1219-1221年)・第6回 (1228-1229年) の十字軍がエルサレムを奪い返したものの、その支配は短期に終わった。続いて、第7回 (1248-1254年)・第8回 (1270年) の十字軍は、イスラム側の拠点となっていたエジプトやチュニジアを攻撃したが、エルサレム付近に十字軍側の建てた諸国家 (復活したエルサレム王国、トリポリ伯国等) は利権をめぐる争いを続けたために弱体化しており、次々とイスラム側の軍門に下った。そしてパレスチナのアッコンが陥落した (1291年) ことにより、ローマ教皇による新たな「海上大国」作りの目論見は挫折した。

その後の欧州諸国では、諸侯・騎士が十字軍への参加費用の重負担等で所領を失う一方、そうした土地を接収した国王は国内の支配権を強め、教皇への依存から脱していった。その結果、教皇は欧州諸国に対する政治面での影響力を低下させていった。

### 匈奴対秦・漢の「陸上大国」争い

一方、ユーラシア大陸の中央部では、紀元前4世紀前後より、匈奴 (トルコ系あるいはモンゴル系の遊牧民) が、モンゴル高原を中心に勢力圏を拡大し始めた。彼らは、单于 (ぜんう) と呼ばれる指導者の下で、隣接する中国の戦国時代 (前403-302年) には、その北方に位置する燕や趙と交易を行っていた<sup>(17)</sup>。その後、中国の国内で西方の秦が勢力を強めると、匈奴は、前述した燕や趙等と共にこれを攻撃したが、敗退した (前318年)。

その後、秦の始皇帝は中国を統一した後、將軍の蒙恬を派遣して匈奴を討伐し (前215年)、河南 (現在の中国・内モンゴル自治区内のオルドス地方) から駆逐した後、匈奴の侵入を防ぐために万里の長城を築いた。さらに秦は、南越 (現在の中国南部及びベトナム) まで支配しようと遠征軍を送るなど、勢力圏の拡大を進めたが、その急速な展開によって国内が混乱し、短期間で滅んだ (前206年)。これを契機として、匈奴 (当時の指導者は頭曼单于) は再び河南の地を攻撃して手中に収めた。その後、内紛の末に頭曼单于の後を継いだ冒頓单于是、東湖 (現在の中国・内モンゴル自治区東部に住む)、月氏 (現在の中国・甘肅省に住む) 等、近隣の異民族を攻撃・駆逐し、秦が滅んだ後の中国で続いた内戦にも介入して、勢力圏を拡大していった。

そして、漢 (前漢、初代皇帝は劉邦) が中国の国内を統一すると、匈奴は中国の北部に侵攻した。これに対し、劉邦は匈奴を撃退しようと、自ら兵を率いて出征したが、白登山で匈奴の兵に包囲されて敗北した (前200年) ため、匈奴に朝貢するという条約を結ぶのを余儀なくされた。その後、匈奴は中国の国内に度々侵攻する一方、楼蘭、敦煌等の西域 (現在の中国・新疆ウイグル自治区) に位置する26もの国々を支配下に収めて巨大な国家を築いた。

さらに匈奴は、中国の辺境に侵攻を繰り返したが、それは領土の拡大よりも家畜や奴隷の略奪を目的としていた<sup>(18)</sup>。これに対して、漢では武帝の即位後 (前141年)、匈奴を攻撃して河南を奪回した (前127年) のに続き、漠南 (現在の中国・内モンゴル地域) まで

(17) 匈奴と近隣諸国・地域との関係は、『史記』、『漢書』、『後漢書』、『晋書』を参照。

手中に収め（前119年）、さらには大宛（西域の交易上重要な拠点）を征服し、西域への勢力圏を匈奴よりも拡大した。

その後、匈奴の支配下にあった国々は次々と離反し、匈奴は一層弱体化した。さらに、匈奴の部族内では内紛が続き（前60-58年）、西匈奴と東匈奴とに分裂（前56年）した。この結果、東匈奴は漢の勢力圏に入り、漢はこの機を逃さず西匈奴を北辺に駆逐した。匈奴等遊牧民族の建てた国は、中国のように統治機構が整備されておらず、勢力圏の拡大等が困難に直面すると、民族・部族間の争いがさらなる混乱を招く傾向があり<sup>(19)</sup>、これに乗じて中国側は内紛に介入し、匈奴内部及び他民族・部族との分断を図った。

その後、中国では前漢に代わって新が建ったが、匈奴への厳しい支配（他国から人質を受け入れることを禁止する等）が続き、これに反発した匈奴は中国の周辺に侵攻し続けた。また、新が近隣の諸部族を蔑視するような政策を採ったことから、西域の諸国は再び匈奴と関係を結んだ。さらに、新が倒れて漢が復興した（後漢、25年）後も、匈奴は中国への侵攻を繰り返したが、蒲奴単于が即位した（46年）後、国内で大飢饉が発生した。匈奴の内部では、これを契機に漢が攻撃してくるという事態を恐れ、呼韓邪単于の率いる南匈奴と蒲奴単于の率いる北匈奴に分裂し（48年）、南匈奴は漢と講和した後に北匈奴を攻撃して蒲奴単于を追放し、南匈奴の勢力圏が増すこととなった。

こうして分裂した後の北匈奴は中国の辺境に侵攻を繰り返した。これに対して漢は南匈奴と結んで北匈奴の討伐を続け、北匈奴は中国の勢力圏から追放された（93年頃）。その後、南匈奴は漢に服属し、中国辺境の防護に当たったが、内部では単于による統制が弱体化していった。その後、漢は西域への支配権を強め、南越も勢力圏に収めた。しかし、こうした領域の拡大による財政の圧迫から漢は国内が混乱した。匈奴の支配から離れたモンゴル高原では、鮮卑（モンゴル系の遊牧民）が台頭し、これに匈奴は漢と共に対抗したが、抑えるのは困難であった。

その後、漢の滅亡（220年）後、中国は三国及び魏晋南北朝の混乱期（220-589年）を迎え、異民族の建てた国家が割拠する（五胡十六国）という事態を迎えた。この中で南匈奴は内紛によって分裂した後、幾つかの国を建てたが、いずれも国内が安定せず短期間で滅び、広大な支配権の回復には届かなかった。匈奴、秦、漢による「陸上大国」作りは、こうして挫折した。

## 突厥対隋・唐の「陸上大国」争い

その後、5世紀頃のモンゴル高原では、突厥（トルコ系の遊牧民族）が、ブミンを指導者として西魏（中国の王朝）や西域と交易を行い、次第に勢力を拡大していった<sup>(20)</sup>。やがてブミンは、西魏の王族と婚姻関係を結び、自らを支配していた柔然（トルコ系の遊牧

(18) Christopher I. Beckwith, *Empire of the Silkroad: A History of Central Eurasia from Bronze Age to the Present*, Princeton University Press, NJ, 2009. 引用は、C・ベックウイズ著、斎藤純男訳『ユーラシア帝国の興亡—世界史四〇〇〇年の震源地』筑摩書房、2017年、161頁。小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、2000年、46頁。

(19) 堀敏一『東アジアの歴史』講談社、2008年、44-45頁。

(20) 突厥と近隣諸国・地域との関係は、『周書』、『隋書』、『旧唐書』、『新唐書』を参照。

民)を討った後、イルリク可汗(かがん、最高指導者の位を指す)と称して突厥可汗国を建てた(552年)。さらに後を継いだムカン可汗は、西方のエフタル(アラル海の西方に住む)、東方の契丹(現在の中国東北に住む)、北方のキルギス(バイカル湖の西方付近に住む)等、近隣の諸民族を征服し続け、東は遼海(中国の東北部)、西が西海(現在のアラル海)、南は沙漠(現在のゴビ砂漠)、北は北海(現在のバイカル湖)までを版図とする巨大な国家を築いた。

こうした中、中国の北周と北斉は互いを牽制しようと、突厥との同盟を求めた。これに対して、突厥は、両者の一方と結んで他方を抑えることを交互に繰り返して国益の拡大を図った。その後、中国で隋が建国されて(581年)国内の統一を進めると、イシュバラ可汗を戴く突厥は、北方の異民族と同盟して隋を攻撃し、北部の国境付近に侵攻を繰り返した。

これに隋は反撃に乗り出し(582年)、突厥を敗走させた。そして突厥では、この敗北が引き金となって内紛が始まり、イシュバラ可汗の率いる東突厥(モンゴル高原付近を支配する)とアパ可汗を戴く西突厥(西域一帯を支配する)に分裂した。東突厥は西突厥からの攻撃を恐れて隋に援助を求め、隋と共に西突厥を破った後、隋と講和した。

その後、東突厥の内部でタルドゥ可汗(イシュバラ可汗の甥)とケミン可汗(イシュバラ可汗の子)が対立すると、隋はケミン可汗と結び、突厥の支配体制に介入した。続いて、東突厥に支配されていた諸部族が反乱を起こす(600年)と、隋の文帝は東突厥と結んでこれを抑え、突厥の領域に影響力の強化を図った。しかし、隋は、西域に加えて高句麗(現在の北朝鮮)も支配しようと出兵したが果たせず、外征による国力の疲弊から国内が混乱に陥った。その中で、唐公の李淵は隋を打倒しようと東突厥に協力を求め、これに応じたシカ可汗(ケミン可汗の長男)は2千騎の援軍を派遣して隋を打倒した。

こうして隋に代わって唐が建国される(618年)と、東突厥は再び中国領内への侵攻を繰り返した。しかし、東突厥に支配されていた諸部族が反乱に及ぶと、唐の太宗は東突厥の討伐に乗り出し、イリグ可汗(ケミン可汗の三男)を捕えて、唐の支配下に収めた(630年)。突厥も匈奴と同様に、中央アジア以外に支配権の拡大を狙ってはいなかったが、唐は漢と同様に、中央アジアまで支配しようと目指していた。そのために唐は、突厥の内紛を利用し、分裂させて弱体化を図った<sup>(21)</sup>。一方の突厥は、支配した他民族・部族に兵役・農耕等の苦役を課したため、これに対する反乱が国内で絶えなかった。

その後、東突厥はイルテリシュ可汗が突厥第二帝国を建てて再び独立し(682年)、唐及び周(唐に代わって一時的に建国、690-705年)に再び侵攻を始めた。そして、唐が復興すると、西域の攻略に専念し、唐と友好関係に入った。しかし、指導者のビルゲ可汗(イルテリシュ可汗の子)が亡くなる(734年)と、東突厥はまたも内紛状態となり、これに乗じたウイグル(モンゴル高原に住む)が介入した結果、東突厥は滅んだ(744年)。一方、分裂した後の西突厥は、トンヤブク可汗の時期(619-628年)に勢力圏を西方に拡大した(後述)が、その死後は内紛が続き、唐の高宗が送った討伐軍に敗れて支配下に下った(662年)。しかし、その後も内部の混乱は続き、ウイグルに服属することとなって滅亡した(780年頃)。

こうして、唐は中央アジアへの支配権を確立した。さらに朝鮮半島では、新羅(現在の韓国)を支援して高句麗を滅ぼした上で勢力圏に収め、玄宗の時期(712-756年)には東

(21) 前掲書『ユーラシア大陸の興亡』207頁。

は渤海（現在の中国東北部に位置した国）と隣接し、西はアラル海の東岸、南はチャンパー（現在のベトナム）と接し、北はモンゴル高原に至る、最大の領域を獲得した<sup>(22)</sup>。そして、広大な領域を収めるために、6の都護府（辺境の行政を担当する役所）及び10の節度使（辺境を防衛する部隊の指揮官）を配置し、外敵の侵攻から防衛するための体制を固めた。しかし、国境を守るために必要な民兵の維持費は、支配領域の拡大に伴い、7倍に膨れ上がって財政を圧迫し<sup>(23)</sup>、さらには、民兵を統括する節度使が反乱を繰り返すなどして衰え、滅亡した（907年）。

こうして、新たな「陸上大国」を築こうとする、突厥、隋、唐による試みは、再び挫折した。その後の中国は、節度使が各々の拠点に築いた国々の興亡が続いた（五代十国、907-960年）。続いて宋が中国を統一したが、隋・唐とは異なり、中央アジアへの勢力圏の拡大には消極的な姿勢を採った。

### 初の「陸上大国」ーモンゴル帝国

12世紀頃、モンゴル高原の黒竜江付近には、遊牧民族のモンゴル人が居住していた。やがて、テムジンがチンギス汗として最高指導者の座に就き（1206年）、近隣諸国家・地域への勢力圏の拡大に乗り出した<sup>(24)</sup>。そして、西夏及び西遼（西域・中央アジア付近に位置した）及びホラズム国（現在のペルシャ及びアフガニスタン付近に位置した）等を支配下に収め（1218-26年）、中国の東北部からアラル海に至る巨大な国家を形成した。

さらに、チンギス汗の死後（1227年）、オゴタイ汗（チンギス汗の三男）は金（中国の東北部を支配した女真族が宋を滅ぼした後に中国の北半分建てた国）を滅ぼした（1234年）のに続いて高麗（現在の朝鮮半島に位置した国）を服属させた。また、バトウ（チンギス汗の長男ジュチの子）は西方に軍を進めてキエフ公国（現在のロシア西部に位置した）及びハンガリー王国を制圧し（1241年）、フラグ（チンギス汗の四男トゥルイの三男）はアッバース朝（現在のシリア付近に位置したイスラム王国）を滅ぼし（1258年）、フビライ（トゥルイの次男）は大理国（現在の中国・雲南省付近に位置した国）や吐蕃（現在のチベット一帯）を各々征服した（1253年）。分けても東欧では、リーグニッツ（別名ワールシュタット、現在はポーランドのレグニツァ）で、迎え撃ったドイツの騎士団を大敗に追い込んでいた。

こうして、中央アジア、中近東から欧州の東部までを版図とするモンゴル帝国が実現した。これは、万人隊（トゥメンタイ）と呼ばれる大規模な騎兵及びそれに武器・食料等を供給する膨大な数の兵站部隊が、「草原を国境のない海のように」進軍し得たからに他ならなかった<sup>(25)</sup>。モンゴルは当初、版図の拡大先として中央アジア以西を念頭に置き、金に侵攻したのは、金品及び食料の強奪が目的であった。しかし、金の抵抗が予想以上に激しかったため、征服した他の民族がモンゴルに反旗を翻した際の警告として、南宋（宋が

(22) Michael Dillon, ed., *China: A Historical and Cultural Dictionary*, Richmond, Surrey: Curzon, 1998, p360.

(23) 前掲書『文明と戦争（下）』67頁。

(24) モンゴルと他国家・地域との関係は、R・マーシャル著、遠藤利国訳『図説 モンゴル帝国の戦い』東洋書林、2001年を参照。

(25) Gilpin, *ibid.*, p58-59.

金に滅ぼされた後、中国の南半分に建てた国)と結んで金王朝を打倒した。その一方、服従する他民族には貴金属・絹等の貢ぎ物と引き換えに自治を委ね、自らに反抗しない限り、住民の虐殺等過酷な弾圧手段には踏み切らなかった。

その後、モンゴル帝国は、広大な領域の全体を統治するのが困難となったため、フビライ汗が即位した(1260年)のを契機に、オゴタイ汗国(モンゴル高原からアラル海付近)、キプチャク汗国(アラル海北部から現在のロシア南部及び東欧諸国)、チャガタイ汗国(中央アジアから現在のインド北部)、イル汗国(現在のイラン及びアフガニスタン一帯)が分離・独立し、フビライ汗の治める元(中国の東北部及び北部一帯)を宗主国とする体制が成立した。

さらにフビライ汗は、元の首都を大都(現在の北京)に移した(1271年)上、征服した高麗人に命じて軍艦を建造させ、大規模な海軍を作り上げた。そして揚子江の流域に500隻の艦隊を派遣して南宋を滅ぼし(1279年)、中国の全土を版図に収めた。しかし、勢力圏のさらなる拡大を目指して近隣諸国・地域に侵攻した(日本には1274年と1281年、現在のジャワ島に位置したシンガサリ王国には1292-1293年)が失敗し、その他の征服地でも反乱が続いた。海を隔てた日本や東南アジアを征服するための大規模な兵力と膨大な数の輸送船を用意するのは、元来陸上に拠点を持つモンゴル族にとって負担の限界を超えていた。実際、1274年に日本を襲った元軍が、初戦に勝利した後に撤退した(その後、帰途で台風に遭い大被害を受けた)のは、「日本を征服するために必要な援軍を派遣するのが海上のみの輸送では困難である」という現地部隊指揮官の判断があったと言われる<sup>(26)</sup>。

その後、フビライ汗が死去する(1294年)と、元では皇帝の座をめぐる内紛に加え、疫病の蔓延等で国内も混乱し、各地で民衆による大規模な暴動が起こった。これに対して、元に駐留するモンゴル軍はチンギス汗やフビライ汗の時代と比べて実戦の経験に乏しく、兵力自体の不足も手伝い(元の国内でモンゴル人の数は百万人足らずに対して、中国人は約7千万人に上った)、治安の回復は難しかった。そして、反乱軍の攻勢にモンゴルの支配層は大都を放棄し北方に逃れ、元は滅んだ(1368年)。

モンゴル人が支配する他民族に数の面で劣るという点は、他の4汗国も変わらなかった。その結果、キプチャク汗国、チャガタイ汗国(1310年頃にオゴタイ汗国を併合する)、イル汗国とも、モンゴルの支配層は多数派の信ずるキリスト教やイスラム教に改宗し、また汗位をめぐる争いで繰り返すうちに統治力を低下させていった。そして、チムール(サマルカンド付近出身の軍事指導者)の率いる軍隊によって、次々と征服・解体された(イル汗国は1393年、チャガタイ汗国は1395年に征服され、キプチャク汗国は1395年に解体された後、1502年に滅亡した)。こうして、ユーラシア大陸のほぼ中心部を勢力圏に収めた、初の「陸上大国」は崩壊した。

以上、「海上大国」と「陸上大国」が次々と登場し交代した経緯を概観してきた。次に、こうした国々が、相互あるいは近隣の諸国・地域と、戦争や安全保障政策を通じて、どのように関係していたのかを検討してみたい。

(26)『元史』、『高麗史』を参照。

## 東西ローマ帝国・フン族・ゲルマン諸部族間の戦争

紀元1世紀頃、ローマ帝国の北辺に当たるゲルマニア（現在のドイツ付近）やサルマチア（現在の黒海沿岸一帯）には、ゲルマン人の諸部族（東ゴート族、西ゴート族等）が住んでいた<sup>(27)</sup>。その後、4世紀頃から、西方よりフン族（アジア系の遊牧民族）が黒海の付近に達した後<sup>(28)</sup>、さらに東ゴート族の領域に侵入し（375年）、カスピ海北岸の草原地帯からゲルマニア及びダキア一帯を支配領域に収めた。

こうして、フン族に追われた両ゴート族は難民となって隣接するローマ帝国に流れ込んで保護を求めた。しかし、難民たちをローマ側が虐待するような態度をとったため、西ゴート族（指導者はフリティゲルン）は反抗し、ローマの軍隊を打ち破って、当時のヴァレンス帝を殺害した（378年）。その後、ローマ帝国は、互いに対立するゴート族やフン族と同盟を結び、彼らにパンノニア（現在のハンガリー付近）の領有を許した（380年）。その後、両部族はローマ帝国に傭兵を送り、テオドシウス帝による内乱の鎮圧に加勢した（388年）。

その後もフン族は西ローマ帝国の傭兵として、アルメニアからメソポタミア北部へとササン朝ペルシャに侵攻した（395-396年）。さらにウルディン（フン族の指導者）は東ローマ帝国の領内で反乱を起こした西ゴート族を鎮圧した（400-401年）。

しかし、その後、ウルディンは兵を率いてトラキア（現在のブルガリア付近）を占領した（408年）。これに対して東ローマ帝国側はウルディンの配下を買収して味方につけ、フン族を撤退させた。一方、西ゴート族の首長アラリックはフン族の兵を雇ってローマへの進軍を目論んだが、西ローマ帝国もフン族の傭兵1千人をイタリア及びダルマチア（現在のアドリア海東岸一帯）に配備してこれに備え、西ゴート族の侵攻を抑止した（409年）。

その後、フン族はドナウ川の中流域を制圧した（410年）後、再び東ローマ帝国への侵入と略奪を繰り返したため、東ローマ皇帝のテオドシウス2世は、フン族に毎年貢納金を送るという条約を結んで講和した（430年頃）。他方で、西ローマ帝国では、将軍のアエティウスがフン族を傭兵として内戦やゲルマン諸部族との戦いに臨んだ。こうした中で、西ローマ帝国は、フン族から兵力の提供を受ける見返りとして、パンノニア一帯の支配を認めた（433年）。

その後、フン族はローマ帝国からの貢納金と同帝国内諸都市からの略奪で得た富により、対抗するゲルマン諸部族への支配を強化していった。さらに、アッティラがフン族の指導者となる（434年）と、東ローマ帝国からの貢納金を倍増する条約を結んだ後、講和を破って同帝国に侵入し、バルカン半島一帯で略奪を続けた。こうした攻撃に敗北した皇帝のテオドシウス2世は、さらに莫大な貢納金を送る取り決めを結んで懐柔しようとした（443年）が、アッティラの軍は東ローマ帝国に再び侵攻した（447年）。

さらに、アッティラは大軍を率いてガリアに侵攻した。これに対してアエティウスを指揮官とするローマ軍は、西ゴート族の部隊と共に応戦し（カタラウヌムの戦い、451年）、

(27) ローマ帝国と近隣諸民族・部族との関係は、前掲書『ユーラシア大陸の興亡』、E・A・トンプソン著、木村伸義訳『フン族一謎の古代帝国の興亡史』法政大学出版局、1999年、L・アンピス著、安斎和雄訳『アッティラとフン族』白水社、1973年を参照。

(28) フン族が北匈奴（前出）の流れを汲むとする説があるが、未だに決定的な証拠は挙がっていない。沢田勲『匈奴—古代遊牧国家の興亡』東方書店、1996年、187頁。

辛くもフン族を撤退に追い込んだ。アッティラはこれにひるまず、態勢を立て直してイタリア半島を侵略した(452年)が、部隊に疫病と飢餓が発生したために撤退し、さらなる東ローマ帝国への侵略を企てたものの、急死して果たせなかった(453年)。

アッティラの死後、フン族に支配されていた諸部族が反乱し、フン族を破った(ネダオ川の戦い、454年)。これに対してフン族の一部は東ゴート族に反撃したものの失敗し、東ローマ帝国の領内に避難した。そして、残余のフン族は、東方の草原地帯に撤退したと言われる。

このように、ローマ帝国は、フン族及び自らとフン族の中間地域に位置するゲルマン諸部族等と対立や同盟を繰り返しつつ、勢力圏の拡大をめぐる争いを続けた。しかし、ローマ帝国は既に、安全を守るための軍事力をフン族やゲルマン諸部族に頼っていたため、こうした争いを有利に進めることが困難となっており、フン族の脅威から脱するには、彼らの自滅を待つのみとなっていた。そして、その脅威が去った後、ローマ帝国は、領内に侵入したゲルマン諸部族による国家が割拠するという、新たな安全保障上の危機を迎えた。

### 西突厥・ササン朝ペルシャ・東ローマ帝国間の戦争

その後、6世紀に入り、東ローマ帝国は、ユニティニアヌス帝の下で、西ローマ帝国が滅亡したことにより失われた勢力圏の回復に乗り出した。そして、ベルサリウスとナルセスの両将軍が率いるゲルマン人の傭兵によって、ヴァンダル王国(ゲルマン人のヴァンダル族が現在の北アフリカ・アルジェリア付近に建てた)、東ゴート王国(前出した東ゴート族が現在のイタリアに建てた)を滅ぼし(534年)、さらに西ゴート王国(前出した西ゴート族がスペインに建てた)から領土の一部を奪い、地中海一帯の制海権を握った。しかし、同皇帝が死去する(565年)と、中近東のササン朝ペルシャから侵入を受ける等の脅威に直面していた。

一方で同じ頃、突厥(指導者は前出したイルリク可汗の弟であるイシュテミ可汗)は、アラル海やボルガ川下流域を越えて、東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルに達し(555-558年頃)、東ローマ帝国と交易を始めた<sup>(29)</sup>。その間、突厥は、エフタル(アラル海の東岸付近を拠点としたトルコ系の遊牧民族)と衝突したため、隣接するササン朝ペルシャ(当時の皇帝はダリウス1世)と結んでエフタルを討伐し、その領土を東ローマ帝国と分割した(557-561年)。しかし、その後、突厥はペルシャ帝国にも領土内での交易を求めたが拒絶されたため、568年に東ローマ帝国との間でペルシャに対抗するための同盟を結んだ<sup>(30)</sup>。

やがて、突厥がシルクロード(ユーラシア大陸の草原地帯を東西に結ぶ交易路)での略奪を再開し(580年頃)、西突厥(前述のとおり、この時期に突厥は東西に分裂した)の

(29) 突厥と東ローマ帝国との関係は、R. N. Frye, "The Political History of Iran under The Sasanians", in E. Yarshater, ed., *The Cambridge History of Iran, vol.3*, p116-180, Cambridge, Cambridge University Press, 1983. を参照。

(30) Liu, Xinra, "The Silk Road: Overland Trade and Cultural Interactions in Eurasia", in Michael Adams, ed., *Agricultural and Pastoral Societies in Ancient and Classical History*, Philadelphia, Temple University Press, 2001, p168.

配下となっていたエフタルがペルシャ帝国の領内に侵入したことから、西突厥とペルシャは本格的な戦争に突入した（第1次突厥・ペルシャ戦争、588-589年）。ペルシャ軍は1万2千人の精鋭部隊を投入してイシュテミ可汗を討ち取り、戦いは突厥側の敗北に終わった。その後、突厥は巻き返しを図り、エフタルに加えてハザル人（西突厥から分かれて黒海の北岸を支配していた）に提供させた大軍を投じて再びペルシャを攻撃した（第2次突厥・ペルシャ戦争、607-608年）が、またもペルシャ軍に敗れ、ペルシャはシルクロードの交易を支配し続けた。

同時期のペルシャは、東ローマ帝国に侵入してアルメニア（カスピ海北岸の地）の大部分を獲得し（607年）のに続き、メソポタミア、シリア、パレスチナの他にアナトリア（トルコの南部）の一部、エルサレムまで版図に収めた（614年）。さらには、ペルシャと同盟を結んでいたアヴァール人（現在のハンガリー付近を拠点としたアジア系の遊牧民）がコンスタンティノープル（東ローマ帝国の首都）を包囲した（617年）のに呼応してエジプトに侵攻し、北部の中心都市アレクサンドリアを手中にしてコンスタンティノープルへの食糧の供給を遮断し、東ローマ帝国を圧迫した<sup>(31)</sup>。

これに東ローマ帝国のヘラクレイオス帝は屈せず、アヴァール人と停戦して（622年）アルメニアに進撃してペルシャ軍を破った。その直後にアヴァール人が停戦を反故にしてトラキアに侵攻すると、同帝はアヴァール人と新たな協定を結んでアルメニアを奪回し（624年）、これに対するペルシャによるコンスタンティノープルへの攻撃を退けた。

さらに、ヘラクレイオス帝は、西突厥の指導者となっていたトンヤブク可汗（前出）に使者を送り、軍事援助を受ける見返りに「莫大な富」を提供する旨を提案した。トンヤブク可汗は、シルクロードをペルシャから奪い返して東ローマ帝国との交易を再開しようと目論んでいたため、この申し出に応じ、1千人の騎兵を動員してペルシャとの戦端を開いた（第3次突厥・ペルシャ戦争、627-629年）。

こうして、西突厥とハザル人は、デルベント（カスピ海の西岸に位置するペルシャ帝国の要塞都市）を制圧した。デルベントを守る軽装備の市民兵は、トンヤブク汗自らが率いる大規模な騎兵の襲来になす術がなかった。続いて、突厥側は、ヘラクレイオス帝自身の指揮する東ローマ帝国の軍と共に、トビリシ（ペルシャ帝国に服属するグルジア汗国の首都で、シルクロード交易の中心都市）を包囲した。これが長期化したため、西突厥側は4千人の駐留軍を残して一端撤退したが、ヘラクレイオス帝はメソポタミアに進軍してペルシャを破り（627年）、続いて、ダスダギルト（現在のダスカラ、ペルシャ帝国の首都クテシフォンの東部に位置する）の王宮を襲って略奪した（628年）。さらには、メソポタミア、シリア、パレスチナをペルシャから東ローマ帝国に返還させることにも成功した（630年）。

一方、西突厥側は東ローマ帝国の戦勝を知ってトビリシの包囲戦を再開し、これを陥落させた。その後、トンヤブク可汗は、配下の将軍に「トビリシの支配者が突厥に従う限り、命を保証せよ」と命じた。これは、シルクロードでの交易に対する支配を安定させるために、拠点となる都市が突厥に対して反発するのを避けようとする配慮であった。

このように、西突厥は東ローマ帝国と軍事・外交上の協力関係を結ぶことによってササ

(31) 東ローマ帝国とササン朝ペルシャとの関係は、Warren Treadgold, *A History of the Byzantine State and Society*, Stanford, Stanford University Press, 1997. を参照。

ン朝ペルシャを挟撃し、共に勢力圏の回復・拡大に成功した。しかし、この後、こうした諸国・集団に対する新たな脅威が中近東に出現することとなった。

### イスラム諸国・十字軍・モンゴル帝国間の戦争

7世紀、中近東のアラビア半島では、イスラム教の指導者マホメットに率いられた集団が、アラビア半島を統一した(632年)。マホメットはその直後に死去したが、その後継者は引き続き勢力圏の拡大を続け、ササン朝ペルシャを滅ぼした(642年)後、8世紀の前半には、中央アジアで中国の唐と向き合った上にインダス川の流域に版図を広げ、欧州大陸ではフランク王国(前出)と境を接し、東ローマ帝国の領土にまで迫った。この間、東ローマ帝国とフランク王国はイスラム側の攻撃を受けたが撃退し(東ローマ帝国はコンスタンティノープルの包囲戦〔718年〕、フランク王国はトゥール・ポワティエの戦い〔732年〕)ものの、唐は敗北し(タラス河畔〔現在のキルギス付近〕の戦い、751年)、中央アジアでの勢力圏を後退させた。

その後、ローマ教皇及び西欧諸国から成る十字軍とイスラム諸国との間でエルサレム一帯の支配をめぐる争いが続く(前述)中、モンゴルがユーラシア大陸の東西に向けて勢力圏の拡大に乗り出した。こうしたモンゴルの動きに、十字軍側からは「プレスター・ジョン(西欧のキリスト教徒が危機に瀕した際、救援に現れるとの伝説に語られた東方キリスト教国の王)の到来」と捉えて歓迎する声が上がっていた。しかし、モンゴル軍が東欧諸国に侵攻した(前述)際の残虐な行為が伝えられると、評価は一変し、ローマ教皇のイノケンティウス4世は、リヨンでの公会議(1245年)において、「モンゴル問題を神のハンマーとしてではなく、外国の侵略勢力として処理する」との決定を下した<sup>(32)</sup>。

その後の1248年、第7回十字軍を率いたフランス国王ルイ9世に、モンゴル側(北部ペルシャの軍事総督エルジギタイ)は使節を送り、「モンゴル側がバクダッドを、十字軍がエジプトを夫々同時に攻撃した後、共同してエルサレムを解放する」ことを目指した軍事同盟の締結を申し入れた<sup>(33)</sup>。この申し出を信じたルイ王は、翌1249年1月、エジプトに上陸し、マムルーク朝(イスラム側が同地に建てた)の首都カイロを目指した。

ところが、同時期、モンゴル側では汗位の継承を巡って内紛が勃発し、新しい汗が決まるまでバクダッドへの攻撃を見合わせた。このため、ルイ王の軍隊はマムルーク朝の軍隊に襲われて大敗し、捕虜となった王は、莫大な身代金を支払って翌1250年5月に釈放された。その後ルイ王は1254年まで十字軍の指揮を執ったが、1252年にモンゴル側から「貢物をよこさなければうち滅ぼす」という内容の書簡を受け取ったことから、対イスラムの共同戦線を組むのを拒否するに至った<sup>(34)</sup>。

その同じ1252年、当時のモンゴル帝国の指導者ムンゲ汗は、クリルタイ(モンゴル族の内部で汗位の継承等重要な決定を行う会議)で、「ペルシャ、シリア、さらにはエジプトの国境まで遠征する」との方針を発表した。これは、「モンゴル帝国の世界制覇を実現

(32) 前掲書『図説 モンゴル帝国の戦い』198頁。

(33) 伊藤敏明『モンゴル vs. 西欧 vs. イスラム—13世紀の世界大戦』講談社、2004年、54-55頁。

(34) 同上、77-78頁。

するための計画」であったが、ムンゲ汗の狙いは、中国の宋とペルシャという当時の二大文明勢力を支配することにあり、欧州は侵攻する先から除外されていた<sup>(35)</sup>。そして、この遠征で指揮を託されたフラグ（前出）は、ペルシャ、メソポタミア、バクダッドを攻め落としていった（1258年）。

こうしたモンゴル軍による侵攻の報に、十字軍が中近東に拠点として築いていたキリスト教国家（前出したエルサレム王国等）では、「モンゴル帝国と同盟するか中立を守るか」で議論が噴出した。しかし、同じ頃、モンゴル側は東欧諸国からの反攻に対する報復として住民への虐殺に及んでおり、これを知ったローマの教皇庁は、「モンゴル人は異教徒であり、信頼すべきではない」との厳命を下した<sup>(36)</sup>。

その後、ムンゲ汗の死去（1259年）に伴い、フラグが軍の大半を一時撤退させると、十字軍諸国はモンゴルの残留部隊に攻撃をしかけたが、モンゴル軍はこれを壊滅させた。しかし、モンゴル軍は長期にわたる遠征で消耗と疲労が激しく、翌1260年9月、パレスチナ地方のジャールートでイスラム軍との戦いに敗れた。フラグは劣勢を挽回しようと、翌1262年、パリのルイ9世に使者を送り、「仏王と共同してイスラムと戦い、エルサレムをローマ教皇に返還し、イスラムに囚われているキリスト教徒を解放したい」と申し入れた。これに対して教皇アレキサンドロス4世は、「イスラムはモンゴルより我々に大きな災いをもたらす」と協力に前向きな姿勢を示したものの、結局、欧州から軍を派遣することとはなかった<sup>(37)</sup>。

その後、モンゴル側はイスラム側の反攻に苦慮し、1287年、イル汗国の指導者アルゲンはローマに使節を送り、モンゴル帝国内でのキリスト教徒の厚遇を伝えた。これを評価したフランス王フィリップ4世は、「フランスとモンゴルが共同してエジプトを攻撃する」という案を返書で送り、アルゲンも「1290年に共同攻撃を実施し、エルサレムを欧州に贈る」と応じた<sup>(38)</sup>。しかし、その前に十字軍はイスラム軍の攻撃を受けて中近東での拠点を失い（前述したアッコンの陥落、1291年）、その数日後にアルゲンも死去し、モンゴルがエジプトを手中にすることはなかった。

結局、十字軍とモンゴル帝国は、お互いの不信状態が長く続いたことが影響し、共にイスラム諸国内への勢力圏拡大を果たせずに終わった。そして、イスラム諸国は、中近東一帯での支配を強化していくこととなった。

## 結論

古代・中世の国際政治において、「海上大国」（古代ギリシャの都市国家、ローマ帝国及びそれに準じた十字軍等）は地中海及びその近隣地域に勢力圏が限られたのに対し、「陸上大国」（匈奴、突厥、モンゴル帝国及びそれに準じたフン族等）はユーラシア大陸の幅広い地域に勢力圏を広げるといった優勢な立場にあった。そして、両者は、中間に位置する国家・

(35) 前掲書『図説 モンゴル帝国の戦い』214-215頁。

(36) 同上、235-238頁。

(37) 同上、286頁。

(38) 同上、286-287頁。前掲書『モンゴル vs. 西欧 vs. イスラム』213-218頁。

地域に勢力圏を拡大しようとする際、交渉し同盟を結び、共同で軍事行動に踏み切ることも見られた（東ローマ帝国とフン族、突厥と東ローマ帝国、十字軍とモンゴル帝国、等）。

しかし、「海上大国」も「陸上大国」も、共に戦争という手段によって勢力圏を拡大したものの、それを維持するための軍事負担への対応が困難となり、結局、外部からの圧力や内部の混乱によって崩壊し、新たな「大国」に支配の座を譲ることを繰り返していた。そこには、「戦争が国家を作り、国家が戦争を作った」<sup>(39)</sup>という構図が如実に示されていた。

(2017.11.23 受稿, 2018.2.9 受理)

---

(39) Charles Tilly, eds. *The Formation of National States in Western Europe*, Princeton, Princeton University Press, 1975, p42.

〔抄 録〕

古代・中世の国際政治において、「海上大国」（古代ギリシャの都市国家，ローマ帝国及びそれに準じた十字軍等）は地中海及びその近隣地域に勢力圏が限られたのに対し、「陸上大国」（匈奴，突厥，モンゴル帝国及びそれに準じたフン族等）はユーラシア大陸の幅広い地域に勢力圏を広げるという優勢な立場にあった。そして，両者は，中間に位置する国家・地域に勢力圏を拡大しようとする際，交渉し同盟を結び，共同で軍事行動に踏み切ることも見られた（東ローマ帝国とフン族，突厥と東ローマ帝国，十字軍とモンゴル帝国，等）。

しかし，「海上大国」も「陸上大国」も，共に戦争という手段によって勢力圏を拡大したものの，それを維持するための軍事負担への対応が困難となり，結局，外部からの圧力や内部の混乱によって崩壊し，新たな「大国」に支配の座を譲ることを繰り返していた。そこには，「戦争が国家を作り，国家が戦争を作った」という構図が如実に示されていた。